

西鶴『本朝二十不孝』と二十四孝

瀨田幸子

〔抄録〕

江戸時代、井原西鶴によって書かれた『本朝二十不孝』は、我が国の文学史において、『孝子伝』『二十四孝』が受容されていく孝子説話史の中に位置づけられる。西鶴は、本書で、孝行の典型である「二十四孝」に対して、新しい孝行の形を提示しようとしている。江戸時代は、孝子説話に描かれた時代と違い、貨幣経済も発達し、物質的にも豊かになった。だから、二十四孝の故事に見られるような、孝行のための苦労や神への祈念をしなくても、それぞれの家業に励み、それで得たお金で物を調達することで、孝行を尽くすことができるというのである。本書は『二十四孝』のもじりとして「二十不孝」と名付け、二十の不孝譚を集めている。それぞれの話は、『二十四孝』『孝子伝』の孝子説話を典拠とし、それを反転させた孝子説話のパロディである。各話の典拠となっている説話とパロディ化の手法を考察した。

キーワード 井原西鶴、『本朝二十不孝』、『二十四孝』、孝子説話、パロディ

はじめに

我が国の文学史の中で、『孝子伝』『二十四孝』が受容されていく孝子説話史は、万葉集や日本霊異記に始まり、平安時代の注好選や今昔物語（巻九）、鎌倉時代の諸説話集や御伽草子『二十四孝』、平家物語、太平記などの軍記物語、さらに江戸時代の本朝二十不孝へと続いていく⁽¹⁾。その中で、異彩を放っているのが、江戸時代に井原西鶴によって書かれた『本朝二十不孝』である。この作品がどう異色であるかという点、『二十四孝』のもじりとして「二十不孝」と名付けて二十の不孝譚を集め、それぞれの話には、『二十四孝』や『孝子伝』からの典拠があるというものである。しかも、その典拠も、そのままの形の典拠ではなく、孝子説話を反転させて典拠としている。言い換えれば、孝子説話のパロディを『本朝二十不孝』で実現しているのである。この『本朝二十不孝』はどのようなねらいで書かれたのだろうか。また、『本朝二十不孝』各話の典拠は『二十四孝』のどの説話なのか、さらにはどのような方法でパロディ化されているのだろうか。それらについて本稿で考察していきたい。

一、『本朝二十不孝』執筆における西鶴の意図 一序文について

江戸元禄期の浮世草子作家井原西鶴による『本朝二十不孝』（貞享三年〈1686〉十一月西鶴四十五歳）は、『好色一代男』『好色二代男』『好色五人女』『好色一代女』といった好色物から『日本永代蔵』『武家義理物語』『世間胸算用』といった世話物に移行する時期に書かれている。その序文には次のように書かれている。

雪中の筍^{たかな} 八百屋にあり、鯉魚^{うを}は魚屋^やの生船^{いけふね}にあり。世に天性の外祈らずとも、夫々の家業をなし、禄を以て万物を調べ、孝を尽せる人、常也。此常の人稀にして、悪人多し。生^{いき}としいける輩^{ともがら}、孝なる道をしらずんば、天の咎^{とが}を遁^{のが}るべからず。其例は、諸国見聞するに、不孝の輩眼前に其罪を顕はす。是^{あづ}を梓^さにちりばめ、孝にすゝむる一助ならんかし。

貞享二二稔^{よ ねんまうすうの}孟 陬 日

初めの「雪中の筍^{たかな} 八百屋にあり、鯉魚^{うを}は魚屋^やの生船^{いけふね}にあり。」についていうと、この中の「雪中の筍^{たかな}」は二十四孝の「孟宗」の故事を踏まえ、「鯉魚」は同じく二十四孝の「姜詩」の故事を踏まえていると思われる⁽²⁾。孝子説話では、筍のない雪の季節にも、孟宗の孝行に天が感動して筍を与えてくれる。しかし、西鶴は、雪の季節でも塩漬けにした筍は八百屋へ行けば買えるという。また、母のため、つねに妻に六、七里を隔てた江の水を汲みに行かせ、つねに生魚の鱈を食べさせた姜詩の孝行に天が感動して、家の傍に水が湧き出で、その水中に毎朝鯉があたえられる。しかし、西鶴は、鯉は魚屋の生船にあるからいつでも手に入るという。孝子説話に描かれた時代は、西鶴の江戸時代より遙か昔で、人々は貧しく、経済も発達しておらず、一般的に食べるものは自分で調達するより方法がなかった。母に筍を食べさせるには、自分で取りに行くしかなく、冬季に筍を得ることなどできなかった。また、母に江の水を飲ませ、生魚を食べさせようと思えば、江までの遠い道のりを自分で歩いて行くしかなかったのである。それに対して、江戸時代は、経済も発達し、物質的にも豊かになっていて、冬でも塩漬け筍は八百屋で売っているし、鯉も魚屋で売っているので、お金を払えば手に入れ、親に食べさせることが出来たのである。序に「世に天性の外祈らずとも、夫々の家業をなし、禄を以て万物を調べ、孝を尽せる人、常也。」と書いているように、西鶴の時代には、二十四孝の故事に見られるような、孝行のための苦労や神への祈念をせずとも、それぞれの家業に励み、それで得たお金で物を調達することで、孝行を尽くすことができたのである。これが、それまでの孝行の典型である「二十四孝」に対して、西鶴が提示しようとしている新しい孝行の形である。そうしてみると、『本朝二十不孝』各話の不孝者のほとんどが町人か農民で、それぞれ家業がある。それは、次に示すとおりである。

- 1 借次屋 2 竹箒屋 3 絹屋 4 塩屋 5 農夫 6 農夫 7 釣り針鍛冶 8 呉服屋
9 葛屋 10 しまふた屋（金利で暮らす家） 11 漆屋 12 宿屋 13（物乞い）
14 鯉屋 15 糠屋 16 膏薬売り（もとは武士） 17 船乗り 18 画描き 19 両替見世

20 刀屋

そして、その道で真面目に働けば、収入を得、それで孝行することが出来るのである。

序は次に「此常の人稀にして、悪人多し。生^{いき}としいける輩、孝なる道をしらずんば、天^{とがめ}の咎^{とが}を遁^{のが}るべからず。」と続き、孝行者の少ない現実を語り、不孝者は天の咎を受けるのだという。たしかに、各話に登場する不孝者達の末路は、最終話「古き都を立出て雨」以外は、死んだり、処刑されたり、斬られたり、所払いになったり、大怪我をしたりと凄惨で残酷なものが多い。

さらに序は「其例は、諸国見聞するに、不孝の輩眼前に其罪を顕はす。」と続く⁽³⁾。各話のタイトルを見ると、その話の舞台となっている場所は次に示すとおり京から始まり、伏見、加賀、大坂と場所を変え、遠くは松前、筑前、長崎と日本全国に広がっている。

- 1 京 2 伏見 3 加賀 4 大坂 5 近江 6 熊野 7 伊勢 8 駿河 9 吉野 10 堺
11 宇津の宮 12 鎌倉 13 広島 14 土佐 15 越前 16 松前 17 筑前 18 長崎
19 讃岐 20 奈良→江戸

そして序は最後に「是を梓^{あづき}にちりばめ、孝にすゝむる一助ならんかし。」と結んでいる。これらの不孝話を本にして、孝行の勧めに役立てようというのである。

このように「序」を見てくると、『本朝二十不孝』は、古来読み継がれ語り継がれ、教えられてきた『二十四孝』的な孝行とは異なる「今の時代（つまり江戸時代）の孝行のあり方を、不孝者を描くことによって逆説的に書いた作品」と言えるのではないだろうか。しかし一方では、序で孟宗、姜詩の説話を思い起こさせることによって、『二十四孝』（『孝子伝』）は踏まえているが、それとは違った孝行話、つまり『二十四孝』のパロディであることを匂わせている。各話には、凄惨で残酷な部分があるにもかかわらずそれほど悲壮感を持たずに読めるのは、これらの話の成立のもとには『二十四孝』及び『孝子伝』の説話があり、そのパロディであることが分かるところに、笑いを生じさせるゆとりが生まれているからだろう⁽⁴⁾。それでは西鶴は『本朝二十不孝』の各話の中にどのように『二十四孝』（『孝子伝』）説話を取り入れていたのだろうか。以下の章で『本朝二十不孝』各話への『二十四孝』（『孝子伝』）の受容の有様を見ていきたいと思う。

二、先行研究に見る『本朝二十不孝』各話の典拠

『本朝二十不孝』各話に、『二十四孝』及び『孝子伝』のどの説話が使用されているのかについては、徳田進氏⁽⁵⁾、井上敏幸氏⁽⁶⁾、田島玲子氏⁽⁷⁾、佐竹昭広氏⁽⁸⁾による研究がある。各氏の見解をまとめ、丸数字の通し番号を付したものが次の「『本朝二十不孝』『二十四孝』（孝子伝）対応表」である。この表には『二十四孝』及び『孝子伝』に出てくる孝子の説話のみを書き入れた。また、表の中で、孝子に付した番号は、『二十四孝』（『御伽草子』）に出てくる孝子の順である。

佐竹氏は、『本朝二十不孝』を、それより少し前に出版された藤井懶斎によって書かれた『本朝孝子伝』今世部の二十人と対応させ、その一人一人が『本朝二十不孝』の各話に対応し、それとあわせて『二十四孝』の孝子も一人ずつ対応すると考え、三つの作品をそれぞれ一対一で対応させる表を作っている。その表にあげられている『二十四孝』の孝子が表の中の括弧なしの孝子である。《 》のついている孝子は、佐竹氏の表には載っていないが佐竹氏の『絵入本朝二十不孝』の本文中に取り上げられている孝子である。

『本朝二十不孝』『二十四孝』（孝子伝）対応表

| | 『本朝二十不孝』 | 佐竹昭広氏の対応 | 徳田進氏の対応 | 井上敏幸氏他の対応 | 田島玲子氏の対応 |
|---|------------|---------------------|--------------|----------------------|----------------|
| ① | 今の都も世は借物 | 19庾黔婁 | 19庾黔婁 | 19庾黔婁 2 漢文帝（笠井清氏） | 2 漢文帝 19庾黔婁 |
| ② | 大節季にない袖の雨 | 4 孟宗 | 13黄香 | | 4 孟宗 13黄香 |
| ③ | 跡の剥けたる姪入長持 | 7 王祥・《杜孝》 | | | |
| ④ | 慰み改て咄の点取 | 16朱寿昌 | 16朱寿昌 | | |
| ⑤ | 我と身を焦す釜が瀾 | 15郭巨 | 15郭巨 | 15郭巨 | 15郭巨 |
| ⑥ | 旅行の暮れの僧にて候 | 24陸續 | 11楊香 | | 11楊香 |
| ⑦ | 人はしれぬ国の土仏 | 20呉猛 | 6 曾参 | | 6 曾子（16？） |
| ⑧ | 親子五人仍書置如件 | 22田真田広田慶 | 22田真田広田慶 | 22田真田香田慶 | 22田真田香田慶 |
| ⑨ | 娘盛の散桜 | 13黄香《大舜》 | | | |
| ⑩ | 先斗に置いて来た男 | 18蔡順 | 6 曾参 9 姜詩 | | |
| ⑪ | 心を飲まる、蛇の形 | 11楊香 | | 11楊香 | |
| ⑫ | 当社の案内申程おかし | 3 丁蘭 | 3 丁蘭 | 3 丁蘭 | 3 丁蘭 |
| ⑬ | 善悪の二つ車 | 江革（日記故事系） | 20呉猛 三州義士 | 12董永 20呉猛 三州義士 | 12董永（20？） |
| ⑭ | 枕に残す筆の先 | 10唐夫人 | 9 姜詩 | | |
| ⑮ | 木陰の袖口 | 5 閔子騫《伯奇》 | 伯奇 | | 伯奇 |
| ⑯ | 本に其人の面影 | 17剡子 | 3 丁蘭 | 17剡子 | |
| ⑰ | 胸こそ踊れ此盆前 | 21張孝・張礼 《8 老萊子》 | 伯俞 | 10唐夫人 18蔡順 | 18蔡順 |
| ⑱ | 八人の狸々講 | 14王哀 | 8 老萊子 | | |
| ⑲ | 無用の力自慢 | 仲由（日記故事系） 《23山谷》 | 23山谷 | 23山谷 | 23山谷 |
| ⑳ | 古き都を立出て雨 | 9 姜詩 | | | |

次に徳田氏は『本朝二十不孝』を『二十四孝』の諸話の逆設定であるとして、各話を対応させている。『二十四孝』各話のストーリー全体を十の型として捉え、その逆設定となっている

話を『本朝二十不孝』から見つけ出すという方法である。徳田氏のあげる十の型は次の通りである。

- 一 反祈願譚 庾黔婁型の逆
- 二 反奉仕譚 黄香・姜詩・曾参・呉猛型の逆
- 三 反思慕譚 朱寿昌・姜詩・曾参・丁蘭型の逆
- 四 反献身譚 郭巨・楊香型の逆
- 五 反承順譚 曾参型の逆
- 六 反友悌譚 田真田香田慶型の逆
- 七 反慰靈譚 丁蘭型の逆
- 八 反泣杖譚 伯俞型の逆
- 九 反慰勞譚 老萊子型の逆
- 十 反遺体尊重譚 山谷型の逆

また、徳田氏は『二十四孝』だけでなく当時流布していた不孝譚も取り上げているがこの表には載せていない。

井上敏幸氏は西鶴が明らかに『二十四孝』説話を意識したと思われる作品に限って、『二十四孝』がどのような方法と意識のもとに作品に生かされているかを三つのグループに分けて考察している。三つのグループとは次の通りである。

- 一、『二十四孝』説話の逆設定が、咄の構成を支えており、それ自体が一篇の方法となり得ているもの。
- 二、『二十四孝』説話を俳諧の付会語として認識し、その逆設定を俳諧的連想によって一篇の構成としたもの、また『二十四孝』の挿絵を直接のヒントとし、その逆設定が俳諧的連想によって纏められたもの。
- 三、『二十四孝』説話の逆・順の設定が、演劇的手法によっていかされたもの。

田島玲子氏は西鶴作品全体の中にみられる中国文学による典拠を研究している。その中の『本朝二十不孝』の典拠としてあげられているものを表に記載した。ここで典拠の理由としては次の三つの型を指摘している。類型の後に示した番号はそれに分類されとする『本朝二十不孝』の説話の番号である。

- 一、典拠が話中の一部に限定して表れるもので、内容面の素材を得た類 (⑮⑰)
- 二、典拠が話中の一部に限定して表れるもので、話の種を得た箇所を持つ類 (⑪⑬)
- 三、典拠が話中の一部に限定して表れるもので、典拠を直接移すのではなく逆用という手を加えた類 (①②⑫⑬⑱⑤⑥⑦⑧)

表を見ると、先行研究者の見解が一致しているのは、

- ④慰み改て咄の点取 ⑤我と身を焦す釜が沸 ⑧親子五人仍書置如件
⑪心を飲まる、蛇の形 ⑫当社の案内申程おかし ⑱無用の力自慢

の六つだけで、他の説話については、対応が研究者によって様々であることがわかる。本稿では、『本朝二十不孝』の中のいくつかの話を取り上げ、それらの話に共通の、西鶴が孝子説話をパロディ化する方法を指摘し、それらの話が『二十四孝』『孝子伝』のどの孝子説話に基づいているのか述べたいと思う。

三、『本朝二十不孝』典拠としての『二十四孝』

この章では『本朝二十不孝』の中から巻二の一「我と身を焦す釜が淵」巻四の一「善惡の二つ車」巻四の三「木陰の袖口」巻五の一「胸こそ踊れ此盆前」巻五の三「無用の力自慢」を取り上げて西鶴のパロディ化の一つの方法を示してみたい。

「我と身を焦す釜が淵」は、釜ゆでの刑に処せられたことで有名な大盗賊石川五右衛門の話である。これは、先行研究でも一致して典拠が『二十四孝』の「郭巨」だとされる。この話の冒頭には、「鏝の釜の穿出し、今の世にはなかりき」と書かれていて、この一文で、この話が「郭巨」の説話を踏まえていることが分かる⁽⁹⁾。郭巨は貧しく、母の食事が足りなかった。その母は三歳の孫（郭巨の子）を慈しんでその少ない食べ物を分け与えた。郭巨は母の食事が少ないことを憂え、我が子を埋めてしまおうと決心して、土を掘ったところ、黄金の釜が出てきたのである。「鏝の釜の穿出し」とはこのことを指している⁽¹⁰⁾。この黄金の釜には「天賜孝子郭巨」と書かれており、天が郭巨の孝行に感じて与えてくれたのであった。けれども西鶴はこれに「今の世にはなかりき」と続ける。この「今の世」とは西鶴の生きた江戸時代のこと、西鶴は、郭巨のような孝行息子は、今はもういないというのである。これから語ろうとする話は、「郭巨」のような昔の孝子譚ではなくて、今の時代（つまり江戸時代）の不孝話なのだという西鶴の意志表示と見て取れるだろう。この話では、「郭巨の釜」の話の踏まえていると本文中に明示されているが、題名からもそうとわかる。「我と身を焦す釜が淵」の「釜」である。「郭巨」では孝行に対する天の恩賜である「釜」が西鶴のこの話では、家業の農作もせず、数々の強盗をし、その上身代わりとなった父親に体中傷を負わせるという不孝な石川五右衛門が、最後に処刑されるのに「釜」が使われる。釜ゆでの刑である。「我と身を焦す釜が淵」とは石川五右衛門が処刑された釜ゆでの釜の中の煮えたぎった湯のことであった。郭巨は孝行心から、子を埋めるために土に穴を掘ると黄金の釜が出てきて子は救われたが、不孝者の五右衛門は、子と共に釜で煮殺されたのである。こうしてみると「郭巨」では「釜」が孝行に対する天の恩賜の象徴、ひいては孝行の象徴であるのに対して、「我と身を焦す釜が淵」では「釜」は不孝を処罰するものの象徴、ひいては不孝の象徴となっているといってもいいのではないかと思う。孝行の象徴であった「釜」を逆手にとって、不孝者はその「釜」で罰せられるのだ。不孝の結末はこうなるのだといっているのである。家業の農作に励んで親に孝行しなければな

らないということの反面教師を描いているのである。「我と身を焦す釜が淵」は、題名の中に『二十四孝』説話の要素が取り入れられ、どの説話のもじりなのかが題名から分かるように仕組まれた話の典型例といえるだろう。

同様に題名の中に『二十四孝』説話の要素が入っているものは「善惡の二つ車」である。「車」がその要素であるが、『二十四孝』で「車」といえば、歩けない親を車に乗せて引く孝子「董永」である⁽¹¹⁾。「善惡の二つ車」には二人の親不孝息子が登場する。備中屋の甚七と金田屋の源七である。この二人は毎夜遊女通いし、所の長者といわれた親の身代を使い果たしてしまい、紙子頭巾を被り手に棒を持って、乞食に出るが、それも思うようにいかず、「是では、埒もあかぬ世や」と親たちをさらりと西の国に捨置き古里を去ってしまう。備前岡山まで行ったところで路銀がなくなり、そこでとどまって、物乞いをするのである。そのころの備前では心学が盛んで、主人に忠ある人、親に孝ある者にはお恵みが深かったので、この二人は、足腰の立たない乞食を担ぎ出し、物乞いに連れて歩く。甚七は、「かた輪車」を作って老人を乗せ、「国を申せば安芸の国、年を申さば二十三、いかなる因果の報にや、ひとりの親を養ひかね、面をさらし勧進す。何もお慈悲は御ざらぬか」と誠がましく歎いて、施しをもらう。一方源七は、年老いた者を背負って歩き、同様に人々から施しをもらう。こうして人から情けをかけられて、野末に、朽ち木を拾い集めたもので庵を作って雨露をしのげるようにし、貰ったものを炊いて、腹を満たすのである。徳田氏と井上氏は、見ず知らずの不具の老人を連れて親孝行のふりをするとところが、各一州から出てきた他人同士三人が親子の契りをおこなう「三州義士」（陽明本、船橋本孝子伝所収）の反転であるとする。しかし、「善惡の二つ車」では、金に困った男二人がそれぞれ老人を一人ずつ連れてあるくのであるから、「三州義士」とは人物構成があっていない。その点で、「三州義士」を「善惡の二つ車」の典拠とするのは考えにくい。さて、車を作って老人を乗せて引いていた甚七は、家に帰れば、「老人に按摩をとらせ、終夜蚊をはらはせ、年寄の草臥をゆるさず、眠ば胴骨を踏みたき^{とて}「逆も腰拔役のおのれめ」と、つらくあたる」。一方、源七はそれを見て、「さりとは、さやうにすべき事に非ず。まづは親と名付、然も其影にて、今日の身うへをたすかれば、其恩は忘れじ」と老人を大切にする。そんな源七をそねみ、甚七はそれ以後源七達とは、「松火のとりかはしもせざりき」と交わりを断ってしまうのである。この甚七の姿は、『二十四孝』の孝子「董永」の反転されたものである。董永は一日田にいて家にいられないので、足のたたない父の世話をするため、父を車に乗せて連れていたのだが、甚七が老人を車に乗せて引いているのは、足のたたない父親（実は他人）を哀れに思った人から施しを貰うためである。自分が食べるために、見も知らなかった老人を父親と騙り利用しているのである。しかも甚七はその老人に孝行するのではなく、家に帰ると、逆に按摩をさせたり蚊を払わせたりする。老人が草臥れても休ませることはなく、眠ってしまうと、胴骨を踏んだりして老人につらく当てるのである。ところで、夜を徹して老人に蚊を払

わせる姿は、『二十四孝』の孝子「呉猛」の反転を思い出させる⁽¹²⁾。呉猛の家は貧しかったので、夏になっても蚊帳もなかった。呉猛は八歳とまだ子どもであったが、自分の身をあらわにして蚊に食わせたら、蚊も親の方には行かないだろうと考えて、自分の衣を脱いで親に着せ、夜中ずっと裸になって蚊に食わせ、親の方へ蚊が行かないようにしたのである。親のために自分の身を犠牲にして蚊を払った孝子呉猛の逆をさせられたのが、甚七につかまった老人である。甚七は呉猛の話の反転させることによって不孝息子と描かれている。一方源七は、老人を親と呼び、そのお陰で施しを受けることも出来、今日生きていられるその恩を忘れてはいけないと、老人を大切に、後には雨風の日には勧進に出ず、まことの親のように孝を尽くすのである。この時から孝行息子となった源七は、老人を背に負って勧進している。孝子董永の説話との関係について話を戻すと、孝行な源七は老人を背に負い、不孝な甚七は老人を車に乗せて引くのである。ところで、佐竹氏は、日記故事系の『二十四孝』に出てくる「江革」の反転であるとする。そこには母を負う江革のみが書かれていて車への言及はないが、『孝行物語』の「江革」には土車に母を乗せて引く江革の絵が載せられていて、その絵は、「善悪の二つ車」の甚七が老人を車に乗せて引く挿絵によく似ている。西鶴は、この江革の姿も思い起こしながら「善悪の二つ車」を書いたのかもしれない。『二十四孝』においては、車に乗せて引くことが孝行であった。つまり「車」が孝行の象徴であったといっても良いだろう。ところが、「善悪の二つ車」では車に乗せて引くことが不孝な行為であり、いい換えれば、「車」が不孝の象徴となっている。「善悪の二つ車」と題名に出てくる「車」に「董永」「江革」の孝行を思い浮かべて読んでみたところが、この話の「車」は不孝であったということになる。西鶴はそんなパロディを意図したのではないだろうか。

「胸こそ踊れ此盆前」は次のような話である。後家に長男と娘がいて、娘の入り婿と長男が遠距離の船に乗るが盆正月にも帰らず、この盆にも掛け売りの借金取りが来る。亡夫の盆のお供えも出来ず、薪もお茶も燈火の油もなくなり、母は嘆くが、その横で、娘は明日の盆踊りの稽古をする。母が意見すると、娘は雪駄を親に投げつけ、小刀を持って怒る母親を嫁がとめる。嫁が自分の櫛などを金や食料に換えて親に渡すのを見た借金取りは、嫁の心に感じて、金を与える。その後長男、婿が戻り、娘は家を出されるという結末である。この話については、先行研究の見解がほとんど全て違っている。徳田氏は、実の娘が、家が傾いたときに豪奢に耽り、諫める母にはいた雪駄をなげつけるのが、反泣杖譚であるとして、『二十四孝』には入っていない「伯俞」を取り上げている。自分を諫める母に雪駄を投げつける娘の姿は、自分を諫めてむち打つ力が弱くなったと親の老いを歎く「伯俞」の反転と見ることも出来るだろう。親に対する孝行心の深さを感じて、持ち物を奪いに来た者が逆に施すことになったという話は『二十四孝』の「蔡順」である⁽¹³⁾。蔡順は、飢饉で食べるものも乏しくて、桑の実を拾い、熟したのとそうでないのに分けていた。そこへ来た追い剥ぎが、熟したのは母に与え、未熟なもの

は自分のものにする、その訳を聞き、その孝に感じて、米二斗と牛の足を与えて去ったという話である。「胸こそ踊れ此盆前」とは息子と嫁が入れ替わっているだけで、同じ型の話が使われていると考えられる。そう指摘しているのは井上氏と田島氏である。しかし、嫁が孝行であるのに対して、実の娘が家の借金のこともお構いなしで明日の踊りの稽古をし、意見する母親に雪駄を投げるというところは孝行な息子に対して不孝な娘という正反対の対応も成り立っている。一方、佐竹氏は奪おうとした者が逆に与えることになったという説話として「張孝張礼」を取り上げている。張礼を殺して食べようとした者が、弟張礼を生かそうとする兄張孝との孝義に感じ二人に米と塩を与えるという説話である。しかし、「張孝 張礼」の説話では親に対する孝行心の深さではなくて、兄弟愛の深さを感じて、奪われるはずが与えられる結果になっているのであるから、これを典拠としているとはいえない。同型の話の使用という点では、井上氏も指摘するように、姑に孝行な嫁は、「唐夫人」の説話を踏まえていると思われるし、また、姑によく仕える姿は、「姜詩」の妻も連想させる。ところで、この話も題名に『二十四孝』説話の要素が取り入れられている。「踊れ（踊る）」である。孝行として親の前で踊り戯れたのは「老萊子」である⁽¹⁴⁾。佐竹氏も娘が盆踊りの稽古をして母を嘆かせるところは、老いた両親の前で舞を舞った「老萊子」の反転であると指摘している。老萊子は七十才にして二人の親に仕えていたが、わが身が年寄ったと親に悲しく思わせないために、幼い者の姿になって舞い戯れ、給仕をしてわざと蹴躓いて転び、泣いたりしたのである。「老萊子」の場合は親の前で舞を舞う、つまり「踊る」行為が孝行であった。踊ることが孝行の象徴なのである。ところが「胸こそ踊れ此盆前」では借金取りに迫られて嘆く母の前で、娘の小さんはそれを気にもとめず、明日の盆踊りの稽古をして、さらに母親を嘆かせるのである。盆踊りは、もともと、年に一度死者の霊がこの世に戻り供養を受ける盂蘭盆会に伴う行事であったが、江戸時代までには、大がかりな風流や集団共通の統一意匠により、歌、衣装等が工夫されるようになり、江戸時代になると大がかりではなくなって定型化していったという。経済的にも物質的にも豊かになったこの時代、盆踊りは死者供養の意味合いは薄く、単なる遊興だったようである。親のお盆のお供えもお祀りも出来ないのに盆踊りで踊ることに対して、母親は「いかに若きとて、去迎^{きりとして}は心なし。人の手前、世の思はく。身の程も恥じぬべし。」と意見することになる。家が今日の暮らしにも事欠いているのだから盆踊りで遊興にふける娘は余計に母親を嘆かせることになるのだ。ここでは、「踊る」ことは不孝なことなのである。つまり、「胸こそ踊れ此盆前」では「踊る」ことが不孝を象徴しているのである。「踊れ（踊る）」といえは孝子の老萊子を連想するが、読んでいくとこの話では「踊り」は不孝な行為だったのだということになるのである。

「無用の力自慢」には相撲の好きな力自慢の男が登場する。神事として始まった相撲は、初めは天皇以下公卿高官だけが見る物であったが、次第に都市の庶民の間でも取られるようにな

り、地方大名に奨励されて、半職業化していった。それが発達して、江戸時代には職業相撲の集団が各地に生まれ、大坂、京都、江戸等で勧進相撲が行われるようになってきた。話の冒頭にはその勧進相撲の様子が描かれている。この相撲ばかりの中、力士ではない人までが相撲に熱中するようになる。この男も「荒磯」と名乗り、親の意見も聞かず相撲ばかりしていたが、在所の強力に負かされ、あばら骨が砕けてしまった。その後は「勿体なくも、親達に足をさすらせ、大小便とられ、冥加につきし身のはて、「親のばちあたり」と名のりける。」という結末である。この、「親たちに足をさすらせ、大小便をとられ」たというところは、『二十四孝』説話の「山谷」の中で、山谷が、使用人も多く、妻もいたけれど、自分で母の大小便の器を扱い、汚れたときは手ずからそれを洗いきれようとしたという話の逆設定になっている⁽¹⁵⁾。「山谷」では、子供が親の大小便の世話をしているのに「無用の力自慢」では、子供が親に大小便の世話をさせているのである。ところで、この話も題名である「無用の力自慢」の中に『二十四孝』説話の中の要素が取り入れられている。「力」である。力持ちの孝子といえば「子路負米」の話で知られた「仲由」である⁽¹⁶⁾。先行研究の中では、佐竹氏が「仲由（子路）」の説話が典拠であると指摘している。仲由が力持ちであったことと相撲ばかりする力持ちの「荒磯」が重なるというのである。私も同意見だが、さらにその「力」は話の中では正反対に使われ、題名の中にもパロディ化した要素である「力」が表明されていると言いたいのである。力持ちの仲由は米を負って百里の外に運びその賃で親を養った。親が亡くなったあと、役職につき、豪華な食事を前にしても、米を負って孝行する親がいないことを嘆いた。つまり、「仲由」では力が強いことが孝行できるあかし、言い換えれば「力（持ち）」が孝行の象徴であった。それに対して「無用の力自慢」では、両替屋の息子才兵衛が力持ちである。力自慢のため家業もつがずに相撲ばかり取る。勧進相撲に素人の力持ちが入って相撲をとるのは遊興である。それは、経済的に豊かな時代だから出来たことであっただろう。才兵衛は、相撲が職業にもなっている時代にお金にもならない相撲ばかり取って、家業は放りっぱなし。親の意見も聞かず、嫁をもらっても「男ざかりに力落としては、口惜し。」と「あたは花嫁をたて物にして」相手にせず、子孫の繁栄も考えず、あげくは、相撲で痛めつけられて親に大小便までとらせるのである。ここでは、才兵衛（荒磯）が力持ちで、相撲ばかりに明け暮れたことが不孝なのである。言い換えれば、「力（持ち）」が不孝の象徴となっているのである。「力」の持つ意味が「仲由」とは正反対になっているのである。「無用の力自慢」という題名の「力」から孝行な「仲由」を思い描いたところが、読んでみると、この話の「力」は不孝のことだった。本当にこの「力」は無用だったよということになるのである。

「木陰の袖口」は次のような話である。後添えの妻が男の連れ子に乳をやって育てたが、その子万太郎（初めは万の助と書かれている）は大きくなって親不孝者になる。意見する継母を憎み、ある時、木陰で「首筋・背中に、いかなる虫か入りて、身をいためける。はやく取りて

給はれ」と継母に言い、袖口から継母が手を差し入れるのを父に見せて、継母が自分に戯れかけると思わせて、追い出してしまう。継母は法師となり、万太郎は雷が連れ去ってしまう。継子が継母につらくあたり、継子が天罰を受ける話である。言い換えれば、継母が継子をいじめた話の逆設定になっているのである。そうしてみると、『二十四孝』の中の継子譚である「関子騫」を踏まえているといえるだろう。また、『二十四孝』の「大舜」には書かれていないが、『孝子伝』の「舜」の説話は有名な継子譚である。しかし、『二十四孝』には入っていないが孝子説話の中には、継母が自分の袖の中にわざと蜂を入れそれを取らせて継子をを陥れるという話がある。『孝子伝』の中の継子譚である「伯奇」の説話がそれである。話の概略は次のとおりである。伯奇の継母は伯奇を憎み、父に、伯奇が子供を殺そうとしていると偽る。また袖に入れた蜂を取らせて、自分を犯したと偽る。父がこれを信じたので、伯奇は家を出、自殺する。これを知り、継母の嘘を知って嘆く父のもとへ鳥が飛んでくる。父が継母に言われて射た矢は、鳥には当たらず継母に当たり、継母は死ぬ。鳥は継母の頭に飛び上がり、その目を啄んだ、というものである。この話の、継母が袖に入れた蜂を伯奇に取らせて自分を犯したと父親を騙すところが、「木陰の袖口」で万太郎が継母を陥れるやり方と丁度逆の形になっている。つまり、この部分については「木陰の袖口」は「伯奇」の逆設定となっているのである。これも、題名の中にパロディ化した要素が表明されているといっているのではないだろうか。その要素とは「袖口」である。題名の「木陰の袖口」といえば淫らな印象を受け、孝子伯奇が継母に陥れられた話を連想させると思っていたが、なんと逆に継子が継母を陥れる親不孝な行為だった、ということになる。

ところで、この「伯奇」は『二十四孝』には出てこない孝子である。それでは、西鶴は何を典拠としてこの作品を書いたのだろうか。これについて佐竹氏は『絵入本朝二十不孝』の中で、『語園』であろうとしている。『語園』には「蜂ヲ以テ継子ヲ讒スル事」と題して次の文章が載せられている。

伊吉甫カ子ノ伯奇ハ継母ニ使テ孝行アリ母伯奇ヲ悪クミテ有時蜂ヲ取テ針ヲサシ我衣ノ上ニ置タリ伯奇其トハ知テ其蜂ヲ取ントス母イト荒ラカ成ル聲ヲ出シテ伯奇吾ヲ引トソサケヒケル吉甫疑フ心アリ伯奇咎無テウタカハルゝ事ヲ口借ク思テ自害メ死ケリ

「木陰の袖口」の冒頭には「曇りなき身をうたがはるゝ程、世に迷惑なる事はなし。」とあって、『語園』の文章の最後「伯奇咎無テウタカハルゝ事」を踏まえて書かれているようにみえる。ただ、この話の題名である「木陰の袖口」は継子の万太郎が自分を意見する継母を追い出そうと、謀ったそのやりかたから付けられたものである。木陰で袖口から手を差し入れるという行為が、話の題名にもなっているのである。ところが、『語園』では「母伯奇ヲ悪クミテ有時蜂ヲ取テ針ヲサシ我衣ノ上ニ置タリ伯奇其トハ知テ其蜂ヲ取ントス」となっている。これでは蜂を取るにしても、題名になっているような袖口から手を差し入れるという行為は起こらない。この部分について、『陽明本孝子伝』では

母先ず蜂をもちて衣の袖の中に置く。母、伯奇の辺りに至りて白さく、蜂我を螫すと。
即ち地に倒れ、伯奇をして除くことを為さしむ。

となっており、『船橋本孝子伝』では

時に母密かに蜂を取り、袖の中に置き園に至る。乃ち母地に倒れて云わく、吾が懷に蜂入ると。伯奇走り寄り、懷を探りて蜂を掃う。

となっていて、両孝子伝共に蜂を袖の中に置いたことが記されている。つまり、両孝子伝に書かれている内容で「木陰の袖口」は書かれているように思われるのである。

孝子説話を取り入れ、さらに「伯奇」を内容として持つ書物として、『注好選』と『今昔物語集』のその箇所を見てみると、次の通りである。

即ち後母、密かに蜂を取りて、袖の中に裏むで菌に至りぬ。乃ち母地に倒れて云はく、「吾が懷に蜂入れり」と。爰に伯奇走り寄りて、懷を探り蜂を掃ふ。（『注好選』上 第六十六）

継母、蜜ニ蜂ヲ取テ、袖ノ内に裏ミ持テ、菌ノ中ニ伯奇ト共ニ行テ、菜ヲ採テ遊ブ間、継母、俄ニ地ニ倒レテ云ク、「我が懷ニ蜂有テ我ヲ螫ス」ト。伯奇、此レヲ見テ、継母ノ懷ヲ搜テ、蜂ヲ揮ヒ捨テツ。（『今昔物語集』巻九第二十）

『注好選』も『今昔物語集』も継母が密かに蜂を袖の中に入れておいたことが書かれている。この記述を見ると、西鶴が、「木陰の袖口」の典拠とした「伯奇」の説話は、『語園』よりも『注好選』『今昔物語集』『両孝子伝』の伯奇説話に近いものだったと思われるのだが、これらの書物は当時普及していない。ところで、伯奇が継母に蜂を捕らされて陥れられた話は、浅井了意の『新語園』下の「伯旁付尹伯奇」にも「母蜂ヲ取テ毒ヲ去テ衣ノ上ニ置ク伯奇 前テ是ヲ取ントス」と書かれており、『譬喩盡』にも「掇蜂莫掇 成豺狼」とあり、その解説に、「白氏文集二出 コレハ継母蜂ヲ取クレト臥所へ継子ヲ招サテ父ニ讒曰我ヲ犯ントスルト」と出ている。また、継母が自分の体に蜂蜜をぬって、体に止まった蜂を追い払わせて継子を陥れる話は昔話にもあり⁽¹⁷⁾、伯奇の蜂の話は、『語園』以外でもよく知られた話であったようである。西鶴は、『語園』や『新語園』に書かれた伯奇も見えていただろうが、当時一般に知られていた話には、もっと『孝子伝』に近い話があって、それを「木陰の袖口」に利用したのかもしれない。

おわりに

『本朝二十不孝』は、西鶴が序でそのねらいを明確にしているとおり、二十四孝的な孝行とは違う、今の時代（つまり江戸時代）の孝行のあり方を、逆説的に説いた孝道奨励の書である。そして、これは、孝行の典型である『二十四孝』、『孝子伝』の孝子説話をふまえ、それをパロディ化する手法で不孝者を描くことによって書かれている。

孝子説話に描かれた時代は、西鶴の江戸時代より遙か昔で、人々は貧しく、経済も発達しておらず、食べるものは自分で調達するより方法がなかった。従って、孝行のためには身を削ることも厭わず、自分の力に余ることは神に祈るしかなかったのである。それに対して、江戸時代は、貨幣経済も発達し、物質的にも豊かになり、お金を払えば大抵の物は手に入った。つまり、西鶴の時代には、二十四孝の故事に見られるような、孝行のための苦労や神への祈念をしなくても、それぞれの家業に励み、それで得たお金で物を調達することで、孝行を尽くすことができたのである。これが、それまでの孝行の典型である二十四孝に対して、西鶴が提示しようとしている新しい孝行の形である。ところが、貨幣経済が発達し、豊かになったがために、その余裕から、家業をないがしろにし、遊女遊び（「善悪の二つ車」）や、踊り（「胸こそ踊れこの盆前」）や、相撲（「無用の力自慢」）等と、遊興にふけり、家を潰す不孝者が出現することになる。西鶴は、その戒めも含めつつ、面白い読み物として、伝統的な二十四孝のパロディ『本朝二十不孝』を書いたのである。

典拠については、『本朝二十不孝』全ての話には言及できなかったが、本稿で取り上げた、西鶴のパロディ化の手法が共通する話に限定して考察した。その手法というのは、『二十四孝』『孝子伝』説話の中の孝行を象徴する要素を取り上げ、それを逆転させ不孝を象徴する要素として話を構成し、その要素を話の題名の中に取り入れて示すというものである。具体的にいえば、巻二の一「我と身を焦す釜が淵」では、その要素とは「郭巨」の「釜」であり、巻四の一「善悪の二つ車」では、その要素とは「董永」の「車」である。また、巻五の一「胸こそ踊れ此盆前」では、その要素とは「老萊子」の「踊れ（踊り）」であり、巻五の三「無用の力自慢」ではその要素とは「仲由」の「力」であった。ただ、巻四の三「木陰の袖口」で取り上げた要素は「伯奇」の「袖口」であるが、これは孝子説話の中の孝行を象徴しているのではない。「袖口」とは、孝子伯奇が継母によって罪に陥れられた方法を示すものであるが、それだけで孝子伯奇を示す象徴性を持つといってもよい。「木陰の袖口」ではその方法が逆転され、継母が不孝息子によって罪に陥れられた方法となっているのである。題名の中に孝子説話の中の一要素を取り入れて示しているということ、またその要素が逆転して話が構成されているという二点で、共通の手法と見なしたのである。

この稿で取り上げた手法について考えた時、『二十四孝』『孝子伝』が伝えられる中で、説話の中のある部分が単純化され、それがその孝子（あるいはその孝子の孝行）を象徴するようになり、さらにはその単純化された語レベルの要素がその孝子を示す、つまり孝子説話の単純化→象徴化→形式化（様式化）という方向性が見える気がする。そしてこの方向性は、さらに図像化への方向も示しているように思うのである。

なお、本稿で取り上げなかった『本朝二十不孝』の話における、『二十四孝』のパロディ化の手法と、典拠については、また稿を改めて述べたいと思う。

〔注〕

- (1) 『孝子伝』『二十四孝』の受容の歴史については黒田彰『孝子伝の研究』（思文閣出版、2001年）による。
- (2) 『御伽草子』（岩波文庫）の『二十四孝』「孟宗」「姜詩」の説話参照。
- (3) 『本朝二十不孝』の話の中には現実に起きた事件を基にして書かれたと思われるものもある。塩村耕『『本朝二十不孝』の一原拠』（『東海近世』創刊号、1988年3月）には巻二の二「旅行の暮の僧にて候」の原拠が示されている。また、小西淑子「近江・五大夫・五右衛門―『本朝二十不孝』を中心に―」（『淑徳短期大学研究紀要』29、1990年3月）には巻二の一「我と身を焦がす釜が淵」に登場する石川五右衛門のことが述べられている。
- (4) 『本朝二十不孝』が『二十四孝』のパロディであることは、矢野公和「『本朝二十不孝』論―アイロニとしての孝道奨励について―」（『国語と国文学』50―6、1973年6月）にも述べられている。
- (5) 徳田進『孝子説話集の研究 近世篇』（井上書房、1963年）
- (6) 井上敏幸「『本朝二十不孝』の方法―『二十四孝』説話を手懸に―」（『語文研究』31・32、1971年10月）、「『本朝二十不孝』の一典拠」（『香椎瀉』26、1981年3月）
- (7) 田島玲子「西鶴と中国文学」（『日本文学研究大成 西鶴』国書刊行会、1989年）
- (8) 佐竹昭広『絵入本朝二十不孝』（岩波書店、1990年）
- (9) 『御伽草子』（岩波文庫）の『二十四孝』「郭巨」の説話参照。
- (10) 母利司朗「黄金の釜―郭巨考―」（『東海近世』5、1992年12月）によると、中国・朝鮮刊本の「郭巨」では郭巨が掘り出したものは黄金一釜（釜は度量衡を表す単位で、中国における六斗四升、つまり砂金）であったが、日本に伝えられ、和訳されて広まる中で、黄金の釜（黄金でできた釜）と理解されるようになったということである。
- (11) 「董永」の車に父を乗せた話は、御伽草子『二十四孝』本文と『両孝子伝』に出てくるが、『二十四孝』本文の前に置かれた漢詩には出ていない。また、日記故事系の『二十四孝』にも出ていない。
- (12) 『御伽草子』（岩波文庫）の『二十四孝』「呉猛」の説話参照。
- (13) 『御伽草子』（岩波文庫）の『二十四孝』「蔡順」の説話参照。
- (14) 『御伽草子』（岩波文庫）の『二十四孝』「老萊子」の説話参照。
- (15) 『御伽草子』（岩波文庫）の『二十四孝』「山谷」の説話参照。
- (16) 「仲由」は日記故事系の『二十四孝』にのみ出てくる孝子であって、全相二十四孝詩系の『二十四孝』には出てこない。
- (17) 『日本昔話通観』26沖繩むかし語り「332継子と王位」（同朋舎出版、1983年）

（はまだ ゆきこ 文学研究科国文学専攻博士後期課程）

（指導：黒田 彰 教授）

2008年9月2日受理